

高速道路と自動車

VOL. 63 NO. 11



2020
11



森川高行・山本俊行 編著

『モビリティサービス』

牧村和彦

本書は、CASE（ケース）に代表されるような、移動のイノベーションに関し、名古屋大学COI（センターオブイノベーション）事業を通じた長年の研究活動（2013～2021年）により生まれた「移動学」ともいべき統合的な学理形成の成果を取りまとめたものである。モビリティイノベーションシリーズの初巻として発刊され、1巻『モビリティサービス』、2巻『高齢社会における人と自動車』、3巻『つながるクルマ』、4巻『車両の電動化とスマートグリッド』、5巻『自動運転』で構成されている。

本書の執筆陣はわが国のモビリティイノベーションを先導し、第一線で活躍する研究者達であり、編集委員長の森川高行氏（名古屋大学）は、長年、日本の交通計画や交通産業、学術研究を牽引してきた研究者である。初巻は、森川氏と愛弟子である山本俊行氏（名古屋大学）により編著され、他に赤松幹之氏（産業技術総合研究所）、原口哲之理氏（日本大学）、金森亮氏（名古屋大学）、中村俊之氏（名古屋大学）という、いずれも最先端の研究成果を地域の解決のために社会実装してきた人たちがばかりだ。モビリティイノベーションの関連書籍がこの数年で数多く登場し、一方で評論的な書籍も多い中、自らの研究成果や実践での苦勞を知っている人たちから語られる「ことば」は、知のマイルストーンそのものである。

本書は6章で構成され、1章では、人類誕生から現在までの移動の歴史を概観したうえで、移動の価値やまちづくりと交通の関係について議論し、移動の本質を探るものだ。コロナ禍においては、これほどまでに移動とは何かを考えさせられたことはなかった。本書は移動の本質を改めて学ぶ上でも多くの視座を与えている。2章では、移動する人の大衆化とそれを支える移動サービスを取り上げ、自動車普及の理由について

論じている。3章では自動車の車両技術に関するイノベーションの歴史と自動車利用を支える関連サービスの歴史について解説しており、4章では、小型のパーソナルモビリティビークル（以下「PMV」という。）について、その歴史と車両技術を解説し、さらにはPMVの社会イノベーションについて論じられている。CASEの重要なピースであるPMVについて体系的にかつ最新の技術を解説した初めての書籍であろう。5章では人のモビリティのサービス化としてシェアリングサービスおよびMaaS（マース）の概要と近年の動向が紹介されている。筆者らの経験を通してシェアリングサービスの成立要因やMaaSの普及への課題が明瞭に論じられている点で示唆に富むものだ。最後の6章では、物流サービスを含むサプライチェーンの概要と最適化問題を解説した上で、近年の物流サービスの進展について紹介している。

モビリティサービスは、用語の概念や定義が曖昧なものが多いことから、事業推進でのコミュニケーションによる課題を生じている。本書は丁寧に専門用語を解説し、牽引も充実しており役立つ内容が満載だ。

本書は人間の活動における「移動」の意味を問いかけ、文明の進化とともに変わってきた移動の歴史とその価値、交通サービスや自動車の歴史をひも解き、人とモノの両面から最新の動向を解説しており、初心者から専門家まで、研究者から実務者まで、多くの方に学びと気づきを与える良書である。CASEはC+A+S+Eが全てバランス良くそろって新しい移動社会を構築していく概念であり、1～5巻の一連のシリーズを手元にそろえておくことをお勧めしたい。

（（一財）計量計画研究所 理事）

森川高行・山本俊行 編著、『モビリティサービス』、コロナ社、2020年5月発行、定価2,900円（税別）